



新しいフィールドと、憧れの魚。一人の男がもたらしたもの。

30年以上も前のこと…。当時サーフィンで海に通っていた小林厚治は波打ち際を歩いてくる一人のアングララーの姿を目にする。

ウェーダーを履いて、長い釣竿。手には大きな魚をぶら下げている。

その魚を見てどうやって釣ったのかと尋ねると、アングララーはおそらく自分で作ったであろう手作りのジグを見せてくれた。

「これで釣れるんですか？」と小林厚治は思わずそのアングララーに尋ねていた。

多くのルアーアングララーが最初にぶつかる疑い、彼もまた同じようにぶつかったのだ。

「釣れるよ」目の前で魚を手を持った人にそう言われても、まだ半信半疑だった。

それでも「釣ってみたい」という好奇心が湧き上がってきた。

釣り具屋に走り、道具を買い揃える。当時、まだシーバス専用のロッドなどなく、ムーチングロッドで、ナイロンラインにミノーを直結して投

げていた。

毎日のように夜の港湾へ通うようになり、やがてさらに広いフィールドを求めて荒川へと足を延ばすようになった。

ここまでは、釣りに魅了されていく一人のアングララーの典型的なストーリーなのかもしれない。

しかし次に彼を待っていたのは、運命的な出会いだったのだ。

彼が荒川で釣りをしていたある夜、釣り場にジャガーを乗りつけ、颯爽と水辺に降り立ったのはどこか垢抜けた雰囲気、服装に身を包んだスマートな男だった。見ていると早くも魚をかけ、ドラグを鳴らしている。

それが小林厚治の初めて目にした西村雅裕氏の姿だった。

当時まだ17mウエダの人間ではなく、有名アパレルメーカーに勤めていた西村氏。シーバスフィッシング黎明期のこの時代に格好よく見えたのは当然

だろう。

容姿だけでなく、釣りのスマートさも目を引いたのだらう。

とにかく、西村雅裕と小林厚治。まだ20歳そこそこだった若き二人はこうして出会った。そして当然のように意気投合し、ともに釣り場へと通うようになった。

「秋がすこいんだ」西村氏の言葉につられ、小林厚治は秋の訪れを待ち、彼と木更津へと向かう。

当時、川崎から東京湾を横断するアクアラインはまだない。週末になると、二人は片道2時間かけて、木更津へと車を走らせた。

「ルアーは引つ掛けじゃないか」と言う人がまだいるような時代だった。

釣り場に人影はほとんどなく、当時の飛ばないタックルでも十分な釣果を上げ続けることができた。

二番いい状況の時に、好きな場所にひよいと入って釣りができたんだ」と彼は言う。

当然釣果を上げ続けるためには腕も必要だろう。だが、それだけではない。

西村氏との出会いという不思議な縁に導かれて、彼は広いフィールドに出ていくことができた。

さらに仲間に紹介されてkomomoというルアーに出会い、西村氏とのシーバスフィッシングに大きな変化をもたらした事も特筆すべきひとつの奇妙な縁と言わなければならない。

ストレスのない豊富なフィールドを独占に近い形で楽しむことは、まだ臆げだったこの国のシーバスフィッシングを切り開いてきた当時の開拓者たちの特権であったのかもしれない。

月日が経ち、西村雅裕氏と釣行を繰り返していた小林厚治はある時、西村氏の持つウエダCPSのロッドのエンブレムに目を留める。

そのシルエットは、伝説の魚をかたどっていた。

どんな魚なのかと尋ねると、西村氏はなんと、愛車にその魚の剥製を積んで、彼のもとまで見せに運んでくれたという。

アカメ。西村氏はその巨大魚が棲む高知県の出身だった。

ここでまた、ひとつの縁がつながっていく。

その瞬間から、アカメはアングララー小林厚治にとって幻の魚ではなくなっていたのだ。

その瞬間から、アカメはアングララー小林厚治にとって幻の魚ではなくなっていたのだ。

その瞬間から、アカメはアングララー小林厚治にとって幻の魚ではなくなっていたのだ。